巻頭言

モチベーション研究所所長　髙橋　一公

はじめに

モチベーション研究所の年次報告書『モチベーション研究』第13号をお届けいたします。本号は特別寄稿1本，資料論文2本，研究所フォーラム抄録を1本掲載することができました。ご投稿いただきましたモチベーション研究所顧問の角山剛先生，第18回フォーラム「もう一つのモチベーション論：失敗回避が求められる仕事でいきいきと働くために」のご講演内容の掲載にご快諾いただきました池田浩先生（九州大学大学院・人間環境学研究院准教授）には，あらためて御礼申し上げます。

第19回フォーラムはシンポジウム企画として，「従業員のモチベーション，エンゲージメント向上に向けて組織が取り組むべき課題」と題しまして2024年1月21日（日）に石山恒貴氏（法政大学大学院政策創造研究科教授），大島崇氏（株式会社リンクアンドモチベーション執行役員　モチベーションエンジニアリング研究所長），武田宏氏（株式会社ニッペコ　キャリア支援室室長）の3氏を登壇者として開催されました。シンポジウムの内容についても次号に掲載を予定しております。

鬼がくる

2019年にテレビアニメ「鬼滅の刃」が放映され，主題歌とともにブームを引き起こしました。2020年には続編として映画も上映されるなどその興行収入は国内で400億円，全世界で500億円を超えたといわれています。その人気について様々な分析がなされているようですが，「鬼退治」というシンプルなストーリーと主人公側と鬼側にもみられた「家族愛」が受け入れられたとの分析もあるようです。

ところで「鬼」とはいったい何者なのでしょうか。私は民俗学者でも歴史学者でもありませんので学術的な解釈はできませんが，野次馬として触れてみることとします。現在につながる「鬼」という呼び名が意識されたのは仏教思想の影響もあり平安時代と言われています。その起源には諸説あるようですが，百鬼夜行や陰陽師の逸話に見られるように「この世ならざるもの」という意味から「隠 (onu)」と呼ばれていたものが「鬼」になったといわれています。

実体がないものや人の理解を超えたものを古代から「神」として崇め恐れるという私たちの精神性は，実存する文化の中で培われたものであることは否定できません。また，日本には神としての「付喪神」に代表されるように無生物に対する畏怖もあるようです。そのなかで「鬼」は古代の神格を持った存在から中国からの思想や仏教思想によってイメージが広がり，いわゆる代表的な「鬼」の姿が出来上がったと言われています。

近藤善博氏の「日本の鬼　日本文化探求の視角」の冒頭に，以下のような『今昔著聞集』からの引用が記されています。

> 鬼は物いふ事なし，其かたち身は八九尺計にて，髪は夜叉のごとし，身の色赤黒にて，眼まろくして猿の目のごとし，皆はだか也，身に毛おいず，蒲をくみて腰にまきたり，身にはようようの物がたを𢘅り入たり，まはりにふくりんをかけたり，各六七尺計なる杖をぞもちたりける

これは伊豆の奥島に着いた「鬼」の姿を描写したものだとされていますが，一般的に考えられている鬼とは少々異なっていることが解ると思います。身長などは誇張されていると思われますが，おそらく異国の海賊を「鬼」と表現したものでしょう。ここでは紙面の関係があるので多くを論じることはできませんが，外国人も含めて当時の日本人の基準から外れたものは「この世ならざるもの」として「鬼」と表現されたのかもしれません。

現代の鬼？

科学技術が発展し，現代社会で所謂「鬼」の実存を信じる方はそう多くないと思われます。だからこそ冒頭に述べた「鬼滅の刃」のようなダークファンタジーに関心が寄せられ日本人の精神が揺さぶられるのかもしれません。しかし，本来の「この世ならざるもの」の意味に立ち返って「鬼」について考えてみると私たち日本人（あるいは人類）が未経験な出来事は「鬼」と重なり，そのイメージが膨らんでいくのかもしれません。老年心理学を生業としている私にとって「老 (oi)」という発音が「鬼 (oni)」に似ていることも気になるところです（この世を去ることを「鬼籍に入る」ともいい、生と死が人間と鬼の関係を代弁しているのようにも思えます）。

2019年にCOVID-19が突然発生しパンデミックを引き起こしたことは人類の歴史に大きく刻まれることでしょう。これも理解不能なものとして「鬼」と捉えるならば，「鬼滅の刃」の流行はCOVID-19の発生を予言し，特に私たち日本人の精神的拠り所である紐帯を暗示したものだったのかもしれない，と勝手な妄想を広げている私を了するのでした。

引用文献

近藤善博 (2010) . 日本の鬼　日本文化探求の視角　講談社
（注：原本は1975年に桜楓社から出版されています）